正門より眺めたブルーモスクのファサード

世界遺産都市を歩く

眺望の網に包まれた都市

イスタンブール

筆者は、ユネスコの世界遺産の諮問機関である世界記念物遺跡会議の副会長などとして、9年間にわたって世界各地の世界文化遺産申請の評価、および世界遺産リストに掲載されている文化遺産のモニタリングにあたってきた。その間、訪れた思い出の都市を振り返る。

西村幸夫（世界記念物会議前副会長／東大教授）
撮影・編集部

ボスポラス海峡の眺望。ひっきりなしに大小様々な船舶が往来する、黒海と地中海をつなぐ古代以来の海上交通の要衝だ。上の写真はブルーモスクやアヤソフィアなどのドームが金色に光る旧市街。中段左は新市街からアジアを眺める（著者撮影）。また、中央はトプカプ宮殿付近から新市街を望む。左頁上は新市街に建つガラタ塔とそこからの眺望。ガラタ橋が新旧の市街を結んでいる（著者撮影）。下はガラタ橋から見たイェニ・ジャーミー。

＊＊＊

およそ肉眼のスケールを超越したような雄大なボスポラス海峡と金角湾、このふたつの水域に隔てられ、かつお互いに寄り添うように、あるいは見方によっては角をつき合わせたように立地する三つの丘――西に欧州の旧市街、北に欧州の新市街、そして東にアジアの西端ウスクダル地区、イスタンブールはダイナミックなビスタが支配する眺望のまちだ。

かつてのオリエント急行の終着駅、シルケジ駅前広場から見る対岸の欧州新市街のビル街、旧市街の丘の突端にたつトプカプ宮殿のテラスから見下ろす海峡の輝き、新市街側から眺める旧市街のブルーモスクやアヤソフィアのミナレット（尖塔）群、フェリーの船上から一望できる両大陸の遠い町並み……随所に趣の異なる視線が開け、新しい世界をかいま見せてくれる。

それぞれからお互いを眺めることができる眺望の網の目の中にこの古都がある。視点の先はいずれも遠い対岸の町並みである。

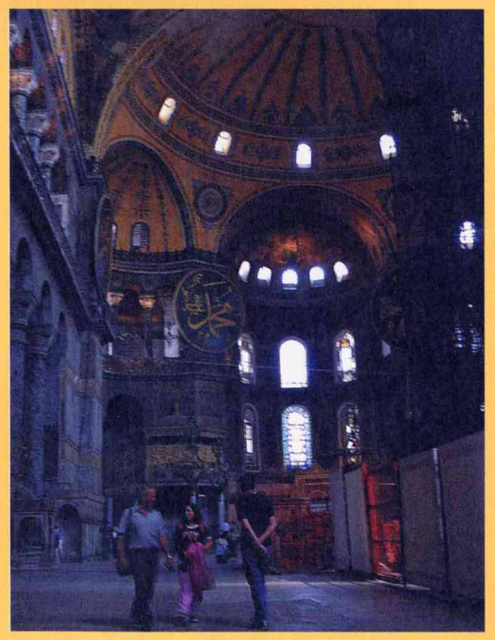
＊＊＊

イスタンブールの歴史地区は1985年に世界文化遺産として登録されている。

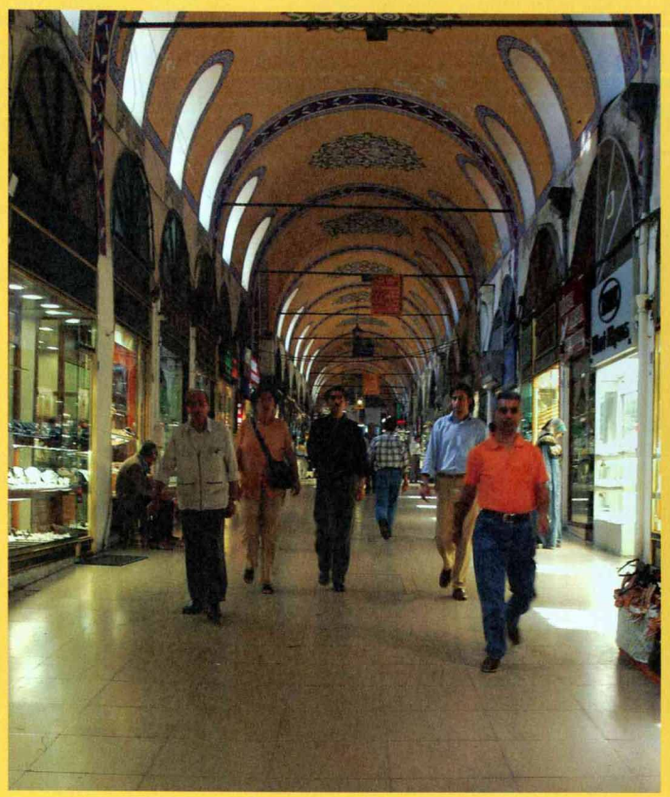
その際の評価書には、「ふたつの大陸の交差点、東ローマ帝国（330年、コンスタンティヌス1世による首都移転のことか：筆者注）・ビザンチン帝国・オスマン帝国の継続した首都、2千年近くヨーロッパとアジアの政治史宗教史美術史上の重要事件と常に関連し続けたこの都市が掲載されていない世界遺産リストを想起することはできない」（ICMOS、1984）とまで書かれているのだ。

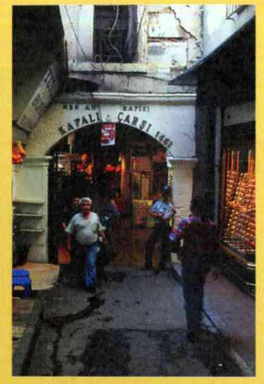
登録されているのは、アヤソフィア、ブルーモスク、トプカプ宮殿を中心とした考古学公園地区、オスマン帝国盛期のスルタン・スレイマン1世モスク群、ビザンチン教会であるゼイレク・ジャーミィを中心とした保存地区、5世紀軍事建築の代表例であるテオドシウス2世の城壁の4地区である。

点のモニュメントの保存もさることながら、8百万人とも1千万人に達するともいわれる大人口を抱えるこの大都市の全体としてのマネジメントが課題となっている。



スルタナメット広場に建つイスタンブールを代表する二つのモスク。ギボンによれば、コンスタンティノープルを陥落させたメフィット2世は、アヤソフィア（左）の壮麗さに衝撃を受けドーム型のモスクに改修を命じた。右頁はブルーモスクの外観と内部。





二つのバザール。グランド・バザールの入り口（左写真）には1461と建設年が記されている。エジプト・バザールには胡椒の店が多い（右頁）。薄暗い雰囲気は中東やモロッコのスークに似ている

文明の十字路という使い古された慣用句があるが、イスタンブールの巨大な中央市場、グランド・バザールに潜り込み、その目くるめく色彩と香気だつ雑踏に身を置くと、その言葉の内実を実感することができる。

世界中のスパイスが大きな袋単位で売られている。かつて西欧が戦争をしてまでも入手しようとした南洋のスパイスがいまここでは至極当然のようにあふれかえっている。西欧料理には必須の干した果実、トルココーヒーと称する細かな珈琲粉、皮革製品、中近東独特の伝統工芸品・布地等の商品陳列の風情や規模、また人懐っこい店員にも勢いがある。バルカン半島や西アジアからもたらされた品々に違いない。

そんな中、バザールにはまるでそこだけ時間が止まっているかのように、チャイを片手に西洋将棋に興じる男たちがいる。

グランド・バザールには様式的なアーケードの端から端まで多様な色と臭いと声音が充満している。文化のモザイク模様があたりを埋め尽くしている。文明の交点を目に見えるかたちで表現するとこうなるのかもしれない。

＊＊＊

まちを案内してくれたアーマド君は若きディベロッパー、その美しい細君、ラビアさんはイスタンブールの大学院に通う建築研究者の卵だった。二人はさりげなくかつ積極的に普段着の大都市をアピールしてくれた。立ち寄ったレストランで味わったパンから一品に至るまで、やはりこの都市の魅力を具現しているようだった。クリームチーズであえただけの茄子の一品は日本でいう焼茄子に似て非なるものか。香辛料とヨーグルトを吟味し駆使した、絶妙で繊細な味覚のトルコ料理が地中海を経てイタリア・フランス料理の発祥となって、世界の三大料理のひとつに数えられるのも実感した。

それにしても、ずっとむかし、小学校時代に聞いたウースクダーラというメロディを、案内してくれた彼の地の若者が一緒に口ずさむとは。異国で、歌詞は違うが同じ歌を口ずさむという不思議な経験だった。

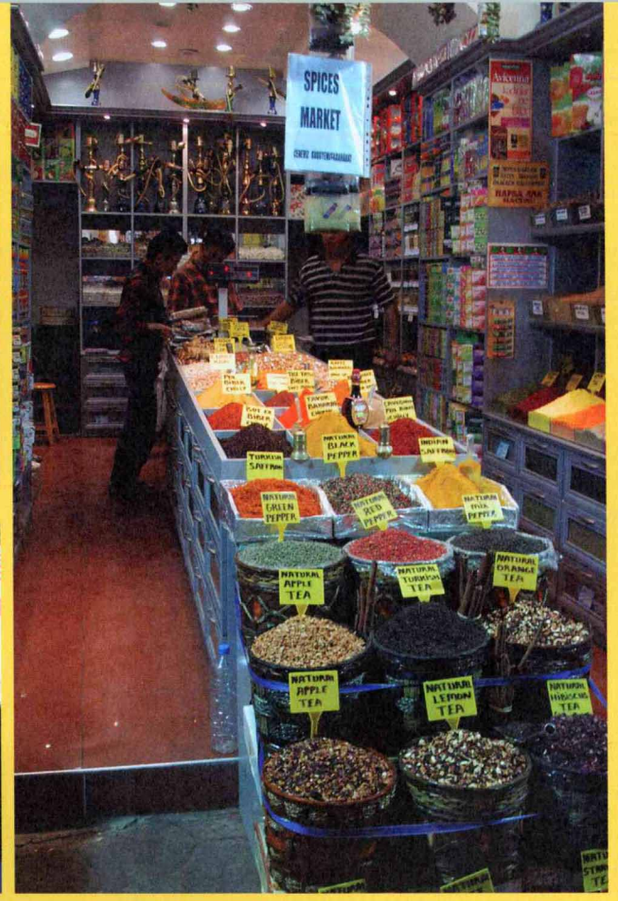
一般にトルコ人はとても親日的だといわれる。お互いに独自の偉大な文化を持ちながら、より巨大な文明圏のフリンジに位置し、自らの身の処し方に自覚的であらねばならなかった国同士の親近感のようなものだろう。地震という天災とつき合っていかなければならないという運命もよく似ている。

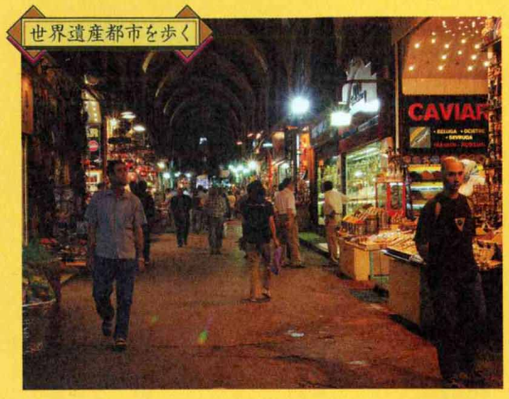
アジアの反対側の辺境にある国が19世紀半ばに自力で近代化を成し遂げたということをトルコの人は、言葉少なにではあるが、評価してくれているようだ。

＊＊＊

フェリーに乗ってアジアサイドにわたると風景は微妙に変化してくるように感じられる。もう少し猥雑で不揃いの木造の町並みに懐かしささえ感じるような風景なのだ。坂の中腹から海峡が見える。アジアの鉄道の終着駅、ハイダルパジャ駅のつき当たりの改札口を出るとまっすぐ先には海が見える。

しかし、ここには最果ての地のような哀愁はない。アジアから見れば大陸の果てではあるが、もちろんここは欧州との接点、経済・産業そして文化の最前線なのである。行き交うここの人たちは歴然と異国の顔立ちをしている。





丘に盛り上がって密集する町並み（上）。スレイマニエ・モスクを頂点に、リュステムパシャ・モスクなどが建ち並んでいる。手前はガラタ橋。くつろぐ老人たち

＊＊＊

イスタンブールはたしかに眺望が支配するまちである。

しかし、このまちは支配者が眺望を演出してつくった欧州の法王や王権の都市とは異なっている。眺望を規定しているのは地形であって権力ではない。

そしてその地形も盆地のようにひとを包み込むような地形ではない。見えるのは丘と海である。むしろしがみついて生計をたてなければならないような地形に見える。

凸面の丘陵地にびっしりと建つ住居群、そこには富めるものも貧しいものも等しく地に足をつけて生活している。それを見る目も庶民の目である。他者を遠望しているものの、そこに見えているのは同時に身内なのである。

稜線のスカイラインに表情を与えているモスクと尖塔群にもあたりを睥睨しているという風情はない。風景に個性はあるが饒舌だというわけではない。あるいはこれこそ絶対者を否定するイスラム的な風景というべきなのだろうか。